

# 〈書物〉の構築—20世紀ポーランドの作家・画家ブルーノ・シュルツ研究

東京大学 文学部・人文社会系研究科 助教

加藤 有子



## 研究の背景

ブルーノ・シュルツ(1892-1942)は1930年代に短篇集を二冊刊行し、20世紀のポーランド前衛文学を代表する作家です。ポーランドとウクライナの国境地帯にある小都市ドロホビチ(シュルツ生誕時オーストリア領、両大戦間期ポーランド領、現ウクライナ領)でギムナジウムの図工教員を務めながら創作し、1920年代には画家としても活動していました。

ユダヤ系だったシュルツは第二次世界大戦中、ナチス・ドイツ占領下のドロホビチの路上で射殺されました。草稿、絵画作品、書簡の大半が戦争によって失われ、戦後始まったシュルツ研究は再版のテキストを基にした小説研究が中心でした。執筆活動が約10年間に終わったこともあり、作品に時系列的な変化や発展をみる視点が欠けており、絵画と小説の両方を体系的に論じる研究もありませんでした。

## 研究の成果

ポーランドとウクライナを中心に、現存するオリジナルの絵画作品と初版本、初出の雑誌、草稿を可能な限り調査しました。それによって、画家であり小説家であったシュルツが目指していた作品は、絵画と文学に分断されず、両者を包含する第三の作品ジャンルとも呼ぶべき〈書物〉という一つの意味生成体であったという結論に至りました。

ポーランドでも反響が大きかったのは、シュルツが自作の挿絵を入れた第二短篇集の初版本の調査・分析です。通常の挿絵の定義を拡張するシュルツの挿絵利用を示した研究は、これまで見過ごされてきた初版本に関心を呼ぶ契機になったと自負しております。

これらの成果は博士論文を基にした単著『ブルーノ・シュルツ—目から手へ』(水声社)にまとめました。シュルツの絵画と小説の両方を視野に入れて体系的に論じる点で、世界で初の研究書となります。

日本では一般公開のシンポジウム「七月の夜」(2009年)と「シュルツの夕べ」(2012年)を開催し、議論や報告のほか、日本語訳者工藤幸雄氏が所蔵していた、世界的にも貴重なシュルツのガラス版画作品(多摩美術大学所蔵)をおよそ18年ぶりに日本で公開しました。



図1 ブルーノ・シュルツ『砂時計の下のサナトリウム』初版本(1937)表紙(Zbigniew Maszewski氏所蔵)



図2 ブルーノ・シュルツ〈獣たち〉(ガラス版画集『偶像賛美の書』より)



図3 ドロホビチの射殺現場に設置されたシュルツ追悼プレート「この場所で1942年11月19日、偉大なるドロホビチの芸術家ブルーノ・シュルツがゲシュタポによって射殺された。2006年11月19日」(ウクライナ語・ポーランド語)。壁画事件のあとに設置されたこのプレートには、国や民族を示す言葉がない。

## 今後の展望

2012年にシュルツ研究の国際誌『フォーラム・シュルツ』(ポーランド語)が創刊され、2号から編集委員に名を連ねることになりました。日本からのポーランド研究の発信にも努めたいと思います。

2001年にはシュルツがナチス将校に強制されて描いた壁画がドロホビチで発見され、イスラエルのホロコースト記念館ヤド・ヴァシェムが、発見者や鑑定者に無断で一部をイスラエルに搬出する事件が起き、その所有権をめぐる国際的な大議論になりました。第二次世界大戦後に国境が変わり、ユダヤ人人口の激減を始めとして、人口構成も大幅に変わったのが現在のポーランド・ウクライナ国境地帯です。イスラエル成立も含めた戦後の新しい枠組みのなか、戦前の同地の文化と記憶がいかに継承/形象化されていくか、記念建造物や博物館展示、芸術作品を題材に、出来事の物語化とそれに際して生じる物語の変更や操作という観点から研究を進める予定です。日本やアジアの戦争の記憶との比較に展開することも視野に入れています。

## 関連する科研費

平成20-21年度 特別研究員奨励費「大戦間期ポーランド領ルヴフのアヴァンギャルド—枠組み提起と「新しいリアリズム」考」

平成22-25年度 若手研究(B)「大戦間期ガリツィアのポーランド系ユダヤ人作家、画家の芸術思想的系譜とモダニティ」

平成22-24年度 基盤研究(B)「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」(研究分担者)研究代表者:沼野充義(東京大学)

(記事製作協力:科学コミュニケーター 福成 海央)